ギリシア幾何学様式の壷絵に見る葬礼表現について

07H1118　渡部千晶

本論文では、ギリシア幾何学様式の壷絵に描かれた、プロテシスやエクフォラといった葬礼習慣の表現にどのような特徴や変化があったか見ることである。プロテシスが描かれた壷は 34 作品、エクフォラが描かれた壷は 2 作品を挙げ、実際の葬礼習慣と比較し考察する。挙げた作品は、アールベリの著作で考察した 55 作品を参考にし、公開されている作品のみ扱った。作品カタログを制作し、作品の記述を行った。

幾何学様式とは、紀元前 900 年から紀元前 700 年ころまで、ギリシアのアテネを中心に流行した美術様式である。メアンダー文や山岳文、三角形といった直線モチーフが主に使われるのが特徴で、これらの直線モチーフに加え動物模様や人物像で壷の表面が装飾されている。人物表現の主題で最も多く描かれた主題が、プロテシスとエクフォラの葬礼表現である。葬礼表現のある壷は、墓標あるいは献酒容器として墓穴の上に置かれていた。壷の器形にはクラーテル、腹部アンフォラ、頚部アンフォラ、オイノコエ、カンタロス、ヒュドリアがあり、クラーテルが特に多く残っている。

ギリシアの葬儀は主に３つの儀礼から成り立っている。この３つの儀礼はプロテシス、エクフォラ、タプトーと呼ばれ、この順番で葬儀は進行された。プロテシスは遺体安置の儀礼で、遺体を水または海水で洗い清めた後、死装束を着せ棺台の上に横たえた。死者によっては着せられる衣服は異なり、戦士であれば甲冑や兜、未婚や結婚してすぐに亡くなった死者には婚礼衣装が着せられる場合があった。死者の上には布がかけられ、棺台の周りは会葬者が囲み、頭を手で打ち付ける、または髪を掻き毟るといった動作をおこないながら、哀悼歌を歌い死者を悼んだ。次に行われるエクフォラは葬送の儀礼である。プロテシスが終わった後、遺体と棺台を馬車または戦車に乗せ、会葬者らも車に続き行列となって墓地まで運んだ。葬送の前後にはプロスパギオンと呼ばれる儀礼が行われることもある。これは死者のために生贄を捧げる儀礼で、牛や山羊、羊、馬などの動物が生贄として殺され、まれに人間も生贄として扱われた。タプトーは埋葬の儀礼であり、火葬と土葬の両方が行われていた。火葬では、墓穴のそばに薪が積み上げられ、その上に遺体を横たえて火がつけられた。火は葡萄酒で消され、近親者によって遺灰が集められ、骨壷に納められた。墓穴には骨壷と副葬品、生贄の骨がともに置かれた。土葬では、遺体を納めるために、成人には石棺、子供には手づくね製のピトスと呼ばれる壷が使われた。遺体の足元に副葬品や生贄が置かれた。火葬、土葬のどちらの方法でも土で墓穴を閉じた後、穴の上には石板と壷が置かれた。壷の底には穴が空けられており、捧げられた水や葡萄酒が真下の骨壷まで届くようになっていた。この壷が本論で考察する壷である。幾何学様式でタプトーが描かれた壷は残っていないため、タプトーは卒論では扱わなかった。

プロテシスが描かれた壷は、中期幾何学様式（紀元前 850 年～紀元前 760 年）の末期になって初めて登場する。後期幾何学様式（紀元前 760 年～紀元前 700 年）になり、プロテ

シスが描かれた壷は多く作られた。エクフォラが主題の壷も後期幾何学様式に作られたが、プロテシスほど多くは残っていない。中期に作られたプロテシスは、クラーテルの胴部中央にパネルが描かれ、そのパネル内に人物像が上下 2 段で描かれている。上段に死者と棺台、下段に会葬者が描かれており、人物像は黒一色のシルエット状になっている。胴体は逆三角形、頭と腕、足は側面から見た姿で描かれている。この作品が、後期になってディピュロンの画家によって模倣されたと考えられている。彼による作品は、壷の把手の間にパネルが設けられ、そのパネルの中央に棺台と死者が描かれ、その周囲に会葬者が描かれている。構図は異なるが人物表現は中期の作品と同じく、部位によって視点が異なる姿で描かれている。ディピュロンの画家による壷と彼の工房によって生産された壷は多く残っており、これらの作品から後の画家や工房でも、同じ人物表現が模倣されたと考えられ、多くの作品が残されている。エクフォラの場合は、中央に棺台を載せた馬車が描かれ、棺台の上にはプロテシスと同様に死者が描かれている。馬車の上、左右に会葬者が描かれている。壷の表面にプロテシスやエクフォラ以外に、戦士や戦車の行列が描かれる作品もある。壷の器形によって葬礼表現の場所や大きさは異なる。クラーテルの場合、中期の作品を除いて腹部に帯状に描かれている。腹部アンフォラの場合は、把手の間にパネル状に描かれ、頚部アンフォラは頚部にパネル状に描かれている。カンタロスとヒュドリアは腹部に、オイノコエは腹部か頚部に描かれている。

考察の結果、プロテシスとエクフォラの作品でともに見られる特徴として、人物表現と構図を挙げた。人物表現については、ほぼ全作品で人物像は胴体を逆三角形で、頭や腕、足は側面から見た姿で描かれ、体の向きやポーズに関わらず全ての部位が描かれている。では、このような人物表現がなされたのはなぜだろうか。理由として、人物を見たままの姿で捉えるのではなく、人体の普遍の姿を追求し、人体の各部の本性そのものを表現する意図があったと考えられている。そのため、胴体が肩幅を強調する逆三角形で、他の部位はとがった顎や、臀部やふくらはぎの膨らみがわかりやすい側面で描かれたことがわかる。また、死者の姿を見ると、横になっているため見えないはずである腕と足が描かれ、胴体も正面で描かれるのも同様の理由からと考えられる。

死者の表現については、アールベリは性別を決めるために、髪の毛の表現、甲冑や兜の表現、衣服の表現、葬礼場面以外の戦士や戦車の戦闘モチーフの有無が基準として有効としている。しかし、作品の記述と葬礼習慣とを比較した結果、有効である基準は甲冑や兜の表現、戦闘モチーフの有無であると結論付けた。髪の毛の表現については、髪の毛が描かれた作品は数作品しかなく、短い線が描かれただけである。王冠または花輪を死者の頭にかぶせる習慣があったため、これは冠を描いたとも考えられるため性別を決定するには不十分とした。衣服の表現は、葬礼習慣で死者に死装束を着せることから、性別は関係ないと考える。作品によって裸体と着衣の違いはあるが、衣服の表現は末期の作品に集中していることから、制作時期の流行による違いと考えられる。死者が甲冑や兜を身につけている場合は、死者は男性とみなすことができ、葬礼表現以外に戦闘モチーフがある場合も、

男性とみなすことができると考えられる。壷は墓標であり、死者がどのような人物であったか示す役割もあったと考えられるからである。

会葬者の表現には、2 通りのポーズがあることがわかった。両手を頭の上に置くポーズ、片手を頭の上に置くポーズである。このポーズは幾何学様式における哀悼表現の伝統的な形式と考えられている。会葬者が死者を悼んで哀悼歌を歌うとき、頭をたたく、髪を掻き毟るといった動作を表すためにこの形式が取られたと考えられる。両手を上げるポーズは、末期になるとスカートのような衣服の表現、乳房の表現があることから女性の身振りと考えられる。片手を上げるポーズは、衣服の表現はないが剣や兜の表現がほとんどの作品で見られることから、男性の身振りと考えられる。

さらに共通する特徴は構図である。プロテシス場面の中央には棺台が配置され、その棺台の上に死者が頭を向かって右に向けて横たえられた姿で描かれている。棺台の下や左右に会葬者が描かれ、会葬者は死者のほうを向いて立っている。実際の当時の習慣を考えると、棺台の周りには会葬者が配置しているはずだが、壷絵を見ると棺台の左右と下に会葬者が描かれている。人物像は重なることなく横に並んで描かれ、棺台を囲んでいるようには描かれていない。実際の状況のままに描くと、会葬者によって棺台と死者は隠れてしまう。死者は葬儀の主役であり、また壷が墓標として使われたことを考えると、墓の所有者であり、葬儀の主役である死者を強調するためにこのような配置がされたと考えた。棺台の下に描かれた会葬者は、本来は棺台よりも手前あるいは奥に位置していたと考えられる。エクフォラの場合でも、人物像は重なることなく一列で描かれている。

どちらの特徴も、葬礼習慣を写実的に描くことを目的としているのではなく、対象がわかりやすい形で描くことを目的に描かれた結果と考える。人物像には身体的特徴はほとんどなかったが、後の作品になるにつれて、部分的にではあるが、写実的に描かれる部分が現れた。人物像では、髪の毛や乳房、目の表現が見られるようになり、また衣服の表現も見られるようになる。衣服の表現はディピュロンの画家の作品にも見られるが、死者にのみ見られ、他の会葬者にはないことから、この衣服は死装束であり、死者を強調するために描かれたと考えた。後期幾何学様式末期の作品では、会葬者にも衣服の表現が見られる。下半身を丈の長いスカートで覆うように描かれており、この会葬者が女性であることがわかる。人物像以外にも、棺台の表現にも変化が見られる。初期の作品では、棺台の脚は両端に 1 本ずつしか描かれなかったが、後の作品では両端に 2 本ずつ描かれるようになり、内側の脚の高さを変えるなどの奥行きを意識した表現が見られる。馬の表現にも奥行き見られる。馬は胴体だけ重なり、足、首、頭だけそれぞれ横に並んで区別して描かれている。足は同じ大きさで描かれているが、首と頭は右側になるほど小さく描かれていることから、首が右側にある馬は奥に位置し、左側の馬は手前に位置していると考えられる。

以上の考察から、壷絵に描かれた葬礼表現の特徴は、人体の部位をわかりやすく描く表現と、人物像を重なることなく個々を区別して描く構図であり、写実的に描かれなかった。しかし、時代を追うごとに、部分的ではあるが、写実的な表現が現れることがわかった。

＜参考文献＞

Ahlberg,G,*Prothesis and Ekphora in Greek Geometric Art*,Coronet Books,1971.

Coldstream,J.N,*Geometric Greece 900-700BC*,Routledge,2003.

Davison,Jean.M,*Attic Geometric Workshop*,L'Erma di Brestchneider,1968.

Kurtz,C.Donna and Boardman,John,*Greek Burial Customs*,Thames And Hudson,1971.